

## 3528 地球のかおり 「澄気澄心」：状況と心模様

スイス、サンモリッツ、3度目の訪問だった。1度目は夏、2度目は厳寒の冬。

この作品の時期は、春から夏へと移り変わる季節。

私の立っているすぐそばに教会がある。実に静寂そのもの。空気も美味しく、澄んでいる。

サンモリッツのシーズンは、冬期は、12～3月、夏期は、7～8月。

春と秋は眠っている。美辞麗句<sup>びじれいく</sup>を並べればきりが無い。

理屈抜きにサンモリッツに来たかったのである。実現でき、大変有難く嬉しい。

実に心が落ち着くのである。空気感も最高。

生きていて良かったという瞬間。詩人にもなれる雰囲気。

サンモリッツは、スイスの南東部に位置し、ヨーロッパ型の長期滞在者向きの

最高級のリゾート地で、デラックスホテルが林立。標高 1.856m。

年間を通じて太陽に恵まれ、さわやかな空気が最大の魅力。青春時代からの憧れだった。

是非、現場に、身をもって体験したかった。

1928年、1948年、冬季オリンピック開催。スイス、アルペンルートのメッカ。

雪解けが遅く、夏は短い。逆に冬の訪れが早い。カラマツが黄葉する晩秋の風情も最高。

三度も訪ねられた私は、なんという幸せ者。ドイツ語、イタリア語、フランス語。

第4の公用語であるロマンシュ語も話されるとのことである。

欧州の高級な社交場という印象がある。ドイツのミュンヘンからも、イタリアミラノからも、オーストリアのランディックからも、フランスからも人が来る。

旅行者の7割が外国人だそう。ベルニナ山群が一望できるピッツナイル山、3.057m。

サンモリッツからアクセスできる。やはり、アルペンリゾートとしての魅力だろうか。

どこにそれだけの魅力があるのか。街の魅力もある。小さな町だが、私の大好きな街である。

なんとも言えない、品の良さのような雰囲気もある。

海外への旅、一度目は初めて見る光景であり、すべてが新鮮で、面白く楽しいことが多い。

時を経て、いつまでも心に残るか、風化するか、今一度、訪ねてみたいと思う二度目は、

一度目が好印象だったことと関係するのだろう。二度目に魅力を感じる時は、

やはり、素晴らしさが本物。感性に合ったのである。はるか遠いスイス、サンモリッツは、

スイスの中でも奥深い所にある。三度も訪ねたのは、私の感性をとらえたからである。

一度目、二度目の思い出が楽しかったことにも起因している。

一回だけ豪遊だった。ピンからキリの旅のスタイル。野宿もする。  
ギャップが面白いし、違いがわかる。現場で体感することで、実に勉強になる。  
サンモリッツ、カールトンホテル。終着駅サンモリッツの真上の高台に建つ五つ星のホテル。  
日本で予約、料金もひと桁違った。何事も体験。一人で宿泊するのは不経済で、<sup>もったい</sup>ない。  
しかし、人がやらないから面白い。映画のワンシーンのような夢の実現。  
男の夢とロマン、親の趣味の一つが映画。高校時代映画部所属。映画の影響が大きい。

外国人が一人、パリの街角のカフェで・・・ひとり、ホテルのラウンジで・・・  
孤独や寂しさを感じるどころか、かっこ良く、絵になる。  
憧れたものだ。外国人だからだろうか。歳を重ねた、まさに中年の男の魅力、  
品性があり、落ち着きがある男ならなおさらである。  
ある喫茶の特集本の名文句が記憶に残っている。一番奥の席で学術書を読み耽<sup>ふけ</sup>る大学教授、  
同じ時間になると現れる老夫婦、いつもと変わらない人がいる。  
調度に時の重みを感じる。ゆらめく湯気の向こうに、過ぎし日を思う。  
昔、ミルクホール、往年の様子を昨日のように語る。  
常連客に耳を傾けつつ、珈琲が目の前に出るのを静かに待つ。

さてここからが本番。最初のひと口を確かめるまでは、おしゃべりも読書も、しばし小休止。  
いつもの味と香りが安堵<sup>あんど</sup>をもたらす。あとは、窓からさす柔らかい陽にまどろみつつ、  
お気に入りの席を見つけたら、それは宝物をひとつ、手に入れたようなもの。  
こんな場面に私も憧れた。映画好きだった私にはこの状況に似た数々のシーンが思い浮かぶ。  
思い浮かぶだけではあきたらない性分。自分で体験したい。  
どうも観客側でなく、制作者側に興味がある。そうした見方、考え方で実践してきて、  
今日があるように思う。まず、行動、実践、体感、体得、これが<sup>くちやく</sup>久業流。

芸術家の先人が通ったというスペイン広場のカフェグレコ。  
先人が腰かけたという席にもついた。壁にもたれ、先人を<sup>しの</sup>偲んだ。一回では済まなかった。  
時間を気にしなくていい一人旅、実にゆったりとした静かな時間をもった記憶がある。  
欧州、このカールトンホテルでも、サンモリッツの街中でも、  
何か似たような、心地いい雰囲気を感じた。

サンモリッツの列車の終着駅は、湖に面している。

サンモリッツに到着したのが早かったので、車の点検を兼ねて預けた。

そして、ホテルに電話した。どこからのお電話ですか。

今、サンモリッツ駅にいと返事した。駅前で待っていてくれという。

ホテルは、駅の真上の高台にある。ホテルにチェックインして、戻って来れば良いと考えた。

少し早いがそうすることに。

その時の服装は、ショートパンツにトレッキングシューズ。真っ黒に日焼けしていた。

八十八日間の旅の途中だった。奮闘した後だけに、泥で汚れていた。

映画に出てくるような大柄な黒人の運転手だった。車はリムジン。

顔色一つ変えないで、トランクとカメラの機具類を軽々と、そしてホテルへ。

もう一人、小柄な素敵なお客さんがおられた。光栄にもご一緒させていただいた。

ホテル前では、支配人とマネージャーが待機。

もう一人のお迎えだったのだろう。しかし、私にも丁寧な挨拶だった。

女性マネージャーが、さすがに気になったのか、夕食は、ホテルのレストランに準備。

ネクタイ着用になっていますと耳元でささやいた。ここはヨーロッパ。

今回は、そうした目的もあった。すでに、五つ星のローヌホテルにも宿泊してきている。

トランクにスーツ等々準備してきている。準備万端。ノープロブレム、とウインクした。

部屋は一室ではない。化粧台も風呂も豪華そのもの。大理石で敷き詰められている。

化粧品の香りも最高である。準備してあるものが半端でない。

普段、お目にかかれない代物。<sup>しろもの</sup>まさに五つ星。調度品といい、雰囲気は最高。

夕食は、ホテル専用のレストラン。ダイニングと呼ぶのだろうか。

イタリア人の小柄な老紳士、女性は奥様らしい。広い部屋で、客は二組だけだった。

コースを注文。赤も白も、ワインをオーダー。素敵な思い出に残る心の財産、晚餐になった。

三回を一回にしてでも体験したいと思っていた。旅立つ前に、ある臨時収入を得ていた。

今回の旅は、最高の体験をと計画していた。美術館や演奏会やミュージカル…

何よりも、宿泊客や観客の雰囲気やマナーも勉強したかった。

何度もするつもりはない。ただ、各国で一度だけ最高のホテルに宿泊し見聞を広げる。

物怖じしないでお楽しみめるか否か。映画のシーンのような体験は、ニューヨークでも。

ブロードウェイのマリオットマルキーホテル。8階にフロント。

入浴後、バスローブを着て、ガラス越しに、ワイン片手に、  
ニューヨーク、ブロードウェイを眺める夢。そして、実現。何事も実感しないとわからない。  
実感、体感することを何よりも優先させたい。  
このサンモリッツでの体験、後々まで役立っている。

サンモリッツ、厳寒の冬期に訪ねた時は、この湖水は、分厚い氷で覆われて、  
一大社交の競馬場になっていた。相変わらず、豪華な毛皮をまとった紳士淑女の集まり。  
これらの人は、今どうしているのだろうか。人生には浮き沈みがある。栄枯盛衰。  
いま、眼前の光景は、そんな気配がまったくない。  
実に透明で、澄んでいる。気も心も澄んでいる、この湖のようでありたいと願う。  
過去は振り返らないことにして、ここまでやって来た。眼前の目標に全力投球あるのみ。  
今年になって、ひさびさに振り返る状況が出てきた。この作品、実に懐かしい。

頭でなく心、感性や感動の作品が残っている。  
このサンモリッツの作品は、私にとって特別な作品。  
体と心と呼吸が整い、目をつぶると、昨日のように思い出す。いい思い出は心の財産。  
この何でもない湖水の風景、この湖水の前で、何度も誓った。何度も願った。  
夢挑戦が継続でき、できれば生涯現役で終われることを。

今、気持ちを新たにしている。  
先のことはわからないが、心身健康最優先。今の状況下で、  
できる時にできることを実践。

この作品、懐かしいだけでなく、気合が入り、元気をもらった。  
京都は連日、半端ない暑さ、少しペースダウンも選択肢。  
健康最優先で頑張りたい。